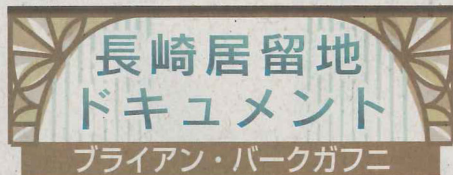


読み書き含め 幅広く

日本人聖職者の育成

東アジアで活動していたパリ外国宣教会のフランス人司祭たちは、文久3(1863)年に来崎し、南山手甲一番地に日本二十六聖殉教者堂(大浦天主堂)を建設した。徳川幕府は、外国人による宗教活動は居留地内に限るという厳格な条件のもと、教会の建設に同意していたが、献堂式が挙行された元治2(1866

仏語とラテン語は徹底訓練



18

5)年2月19日から1カ月もたたないうちに、農民の一人が天主堂を訪れ、彼らが長崎の郊外に住む潜伏キリシタンであることをフランス人司祭に打ち明けた。それは世界を震撼させた「信徒発見」の瞬間だった。

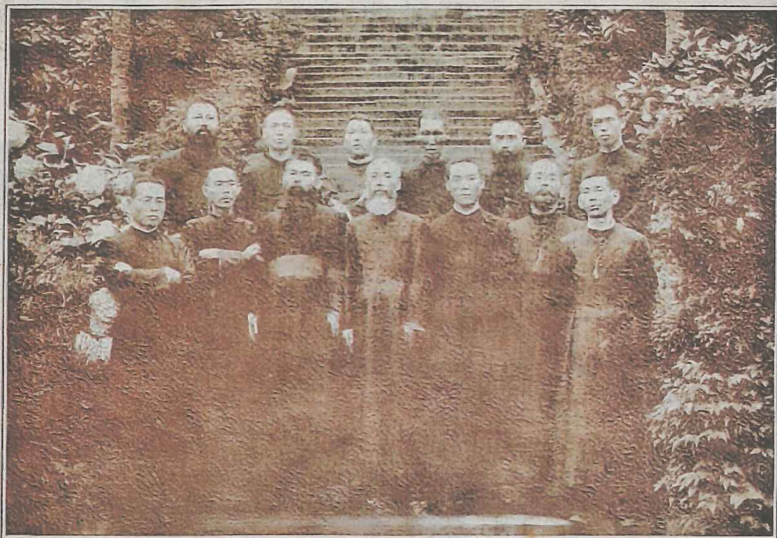
明治6(1873)年、明治政府は太政官布告第68号によりキリシタン禁制の高札を撤去した。江戸時代初期から続けられてきた厳しい禁教政策に終止符が打たれ、長崎周辺に潜伏していたキリシタンたちは公然と信仰を

め、福祉活動に尽力し、現在も「ドロさま」と呼ばれ親しまれるマーク・マリイ・ド・ロ神父であった。

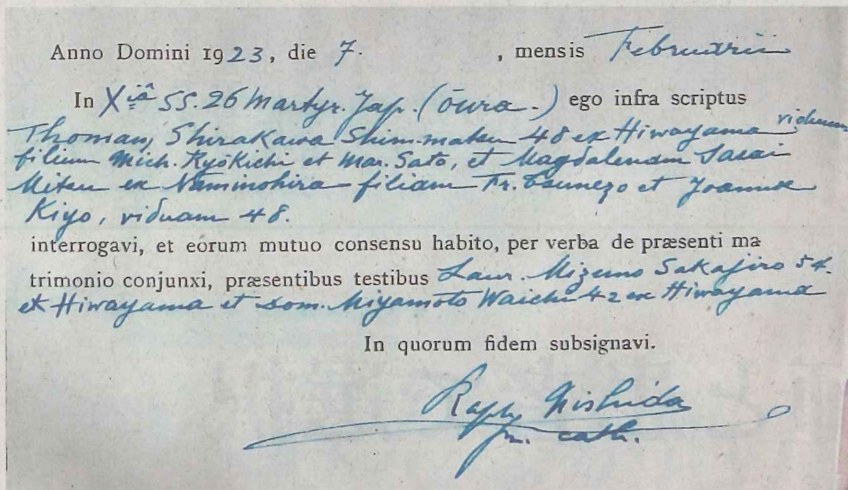
初期の神学校に入学する少年たちはほとんどが無学であったため、日本語の読み書きの教育も受けたと思われる。神学校のカリキュラムには、聖書やキリスト教の教義から教会史、宣教学、経営学、西洋の世界観まで幅広い科目があり、フランス語とラテン語の徹底的な訓練も行われた。ラテン語は、世界中のローマ・カトリック教会の共通語であり、大浦天主堂で作成される出生台帳やその他の文書で使われて

長い訓練を経て神学校を卒業した神学生たちは、正式な司祭叙階を受け、次第にフランス人司祭に代わって長崎県をはじめ日本各地の聖職に就いた。彼らの中には、カトリック研究の深い専門知識を身につけただけでなく、ひげを生やし、フランス人司祭の文化やマナーを身につけた者さえいた。

大正14(1925)年、長崎公教神学校は、生徒数の増加により、長崎市小峰町の浦上校舎(現在の聖フランシスコ病院所在地)に移転。太平洋戦争の暗雲が立ち込む昭和15(1940)年に元の場所に戻ったが、同27(1952)年に浦上天主堂に程近い長崎市橋口町に再び移転した。一方、南山手の建物は、昭和47(1972)年に「旧羅典神学校」として国の重要文化財に指定され、平成30(2018)年から隣接する旧長崎大司教館とともにキリシタン博物館として公開され現在に至る。



日本人司祭たち。大正期の大浦天主堂前が。(筆者蔵)



太平洋戦争後に発行された絵葉書に見る(左から)大浦天主堂、旧羅典神学校、旧長崎大司教館(筆者蔵)

ラファエル西田三郎神父は、大浦天主堂の婚姻台帳に日本人信者の結婚をすべてラテン語で記録した。写真は、大正12(1923)年2月7日の記録。その後、浦上天主堂の主任司祭に就任した西田神父は、同天主堂内で被爆して即死することになる。

(カトリック大浦教会蔵)

月一回掲載します

(グラバー園名誉園長)